

中国・新疆ウイグル自治区における農的郷鎮企業の課題

阿依努尔 艾仔木*・市川 治**

The Problems of Township Enterprises in Agriculture of Xinjiang, China

Aynur HEZIM* and Osamu ICHIKAWA**
(June 2004)

はじめに

中国・新疆ウイグル自治区の農業展開に欠かすことのできない要素のひとつに畑作、果樹、酪農などの事業を行う農業部門を中心とした郷鎮企業(「農的郷鎮企業」と呼ぶ)がある。郷鎮企業は、1978年から始まった中国農村改革過程において農村内部で誕生形成された新たな組織であり、かつて人民公社時代に公社や生産大隊などが経営した「社隊企業」(人民公社と生産大隊の資金と労働を基礎とした集団所有制企業)が、人民公社の解体によって郷営や村営の集団経営企業に再編されたものである。1984年以降になると、人民公社時代での「社隊企業」と人民公社の解体によって形成された「個別企業」やパートナーシップ経営の企業という「私有企業」を含めて、農村内の企業を「郷鎮企業」と呼ぶようになった。つまり、郷鎮企業は、人民公社の集団システムの解体と事実上の家族農業経営制度である生産請負制を導入してからの農村改革の成功例の一つである。郷鎮企業を形成する目的は、中国・新疆ウイグル政府における企業化あるいは工業化、農民の収入水準の向上、農村内過剰労働力の吸収、農村の工業化の進展を推進させることにあった。

郷鎮企業の一般的な構造をみると、集団企業(かつての社隊企業)と私有企業(個別企業、農家共同経営)の二つに区分できる。現在新疆経済の中での郷鎮企業は、主に私有企業を中心に成長を遂げている。このような郷鎮企業は、事業構造そのものが多角化し、衣類、食品製造、野菜、果樹、食品加工、牛乳製品、セメント、プレハブ、部材の農業、工業、建築業、交通運輸、旅行、飲食などのサービス事業を手がけ現在の急速な成長を遂げ、問題点を抱えな

がらも、現段階では新疆ウイグルの国民経済にとってなくてはならないものになっている。とりわけ、最近農業部門や農産物生産と関連するという農的企業の形成が進み、新疆の農業、農村経済等の発展にも影響を与えている。

ここではこのような認識から、新疆・ウイグル自治区における農的郷鎮企業が地域の農業・農家経済の発展にどのような影響を与えてきたのかを、農業部門(農産加工部門)を中心とした農的郷鎮企業の展開の可能性をもとに考察する。

1. 新疆郷鎮企業の動向

これまで、そして今日も中国は農業生産を主としてきた国であり、総人口の大多数を農村に擁している。農業・農村問題の解決は重要な国民的課題である。このような中で、中国農村における郷鎮企業は急速に展開し、大きな位置を占めてきた。郷鎮企業統計年鑑によると、2002年における企業数は2,132.7万、職員数は13,287.7万人、総生産額は14,043.5億万元であった。それを1980年と比べれば、それぞれ15倍、4.4倍、21.4倍も増加した。そのほか、このことは郷鎮企業の商品の生産量が占める割合をみても明らかである。例えば1995年においては、飲食品は中国全体の中で40%、セメントで40%、衣類で80%、中小農具の場合では95%というように高い割合を示しているのである。この郷鎮企業の特徴を要約すると次のとおりである。

新疆の郷鎮企業は、当初集団企業を中心とした小規模な手工業や食油加工などの農村工業から始まった。企業数及び総生産額をみると、1985年から1995年まで急速に発展し、1995年以降成長はやや鈍化傾向を示している。表1で示したように企業数は、1985

* 酪農学園大学大学院 酪農学研究所

Graduate School of Dairy Science, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

**酪農学園大学 農業経済学科 農業会計学研究室

Department of Agricultural Economics, Agricultural Accounting, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

表1 新疆における郷鎮企業の発展状況

(単位：万戸、万人、万元)

年 度	企業数	職員数	総産額	給与総額	純利潤	税 金	工業総産額
1980	1.2	19.4	32,851	9,816	8,466	594	13,295
1985	9.9	27.6	109,559	26,287	17,201	4,722	43,824
1990	14.4	46.4	68,299	5,194	26,994	11,177	127,841
1994	25.0	68.6	1,145,752	166,700	62,728	69,494	569,628
1995	28.1	74.5	1,692,333	224,014	129,032	76,479	23,050
1996	28.3	78.2	2,238,317	258,504	157,013	76,950	1,017,275
1997	28.7	78.9	2,375,844	27,921	154,969	84,152	1,547,393
1998	26.9	71.3	2,457,410	290,021	156,578	82,365	1,112,091
1999	29.7	74.9	2,736,766	311,609	164,949	93,490	1,239,596
2000	31.7	80.6	3,022,076	353,322	191,764	100,444	1,352,454
1985年を1とした時の 1995年の倍率(倍)	2.8	2.7	15.5	8.5	7.5	16.2	0.5
1995年を1とした時の 2000年の倍率(倍)	1.1	1.3	1.4	1.4	1.2	1.3	1.3

出所：中国人民共和国農業部編 [中国郷鎮企業統計年鑑]，2000，2001年版，中農業部出版より作成。

年9.9万であったが、1995年になると28.3万になり2.8倍も増加した。総生産額では、1985年109,559万元であったが、1995年は1,692,333万元になり15.5倍まで増加した。2000年には、企業数が31.7万、総生産額は3,022,076万元になり、1995年と比べるとそれぞれは1.1倍、1.4倍を増加した。企業形態からみると、郷鎮企業の成長を牽引したのは主に私有企業である。事業別の構造からみると、サービス業、工業、農業等の多角的な事業を行っているが、その中では交通、飲食、商業などのサービス事業が中心である。例えば企業数と総生産額という指標からみると、図1、図2で示したようにサービス業という第三次産業中心の企業数の比重が全体の中では非常に高い割合を占めているが、販売額では第二次

産業中心の企業が多数を占めている。つまり、第二次産業では農畜産物と関係がある加工等を中心とする郷鎮企業の部門が徐々に成長した。また第一次産業中心の企業では、当初単一の農業経営部門を行う経営が多かったが、その後付加価値をつけた特色農業¹⁾、観光農業や、ブドウを中心にした果樹・畑作(小麦、トウモロコシなど)、酪農などの複合経営や多角経営を行う郷鎮企業が形成されている。複合経営の中身を具体的にみると、農業では牛、ウサギ、羊等の畜産と、野菜、果樹、小麦などの耕類生産である。

工業では衣類、食品製造、食品加工、乳製品、セメント、プレハブ材等の生産を行っている。このなかの衣類、食品製造、食品加工や乳製品が農産物生産に直接関連している。またサービス事業では建築、

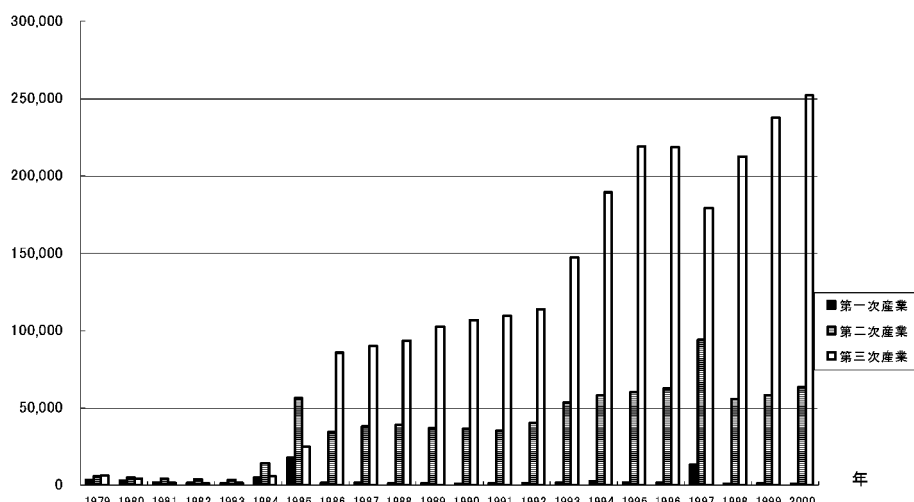


図1 新疆における郷鎮企業の産業別数の推移

注：データは、新疆ウイグル自治区郷鎮企業局編「統計年報」より作成。

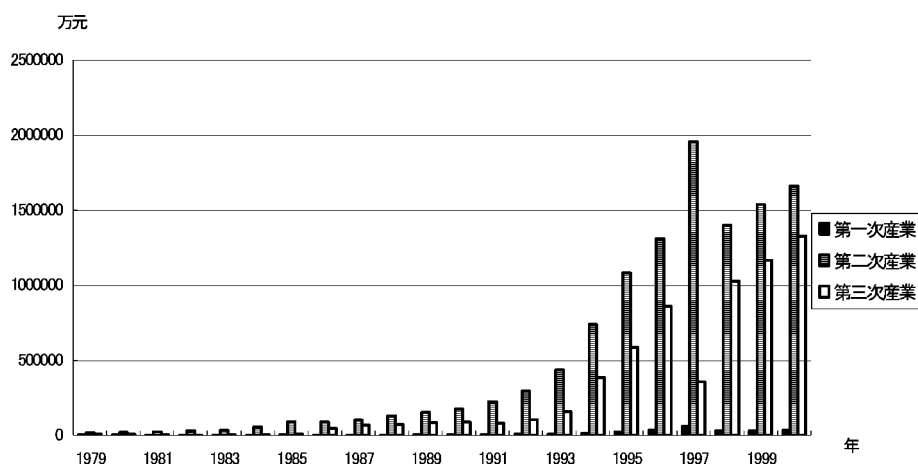


図2 新疆における郷鎮企業の産業別生産額の推移

注：データは、新疆ウイグル自治区鎮企業局編「統計年報」より作成。

交通、商業、旅行などの事業を手がけ、国民経済の中で高い位置を占め、新疆農村・農家経済の展開にとって重要な部分の一つになっている。

中国郷鎮企業統計年鑑によると、1998年新疆における郷鎮企業が生産した付加価値は新疆のGDPの5.4%、財政収入に占める郷鎮企業の納税金額の割合が4.7%、農村労働力に占める郷鎮企業職員の割合が21.3%であった。特に、注目されるのは、郷鎮企業の年間給与総額の農民純収入での割合が、1996年では8.4%であったが、1998年には、20.8%に達したことである（新疆統計局編「新疆統計年鑑」による）。表2で示したように、農民の収入が農家人口1人当たり郷鎮企業生産額の増加、すなわち郷鎮企業の発展は、農民の収入の増加に関連しているように思われる。また、新疆ウイグル自治区消費支出にも大きな変化をもたらした。例えば、1980年～2000年までの間に、新疆ウイグル自治区における都市住民の年間消費支出は1人当たり326元から2,458元に増加したが、農村住民についても、1人当たり120.18元から916.47元に増加した。商品の消費量から見ると、動物性食品及び牛乳・牛乳製品に対する需要量が増加している（表3-1、表3-2）。

このように新疆における郷鎮企業の中で、農産物と関係がある加工部門等が成長し農村の工業化と農

村・農民経済の発展に貢献しているとみられるが、必ずしも十分に分析を行うだけのデータが揃っているわけではない。そこで、次にみる優良事例からそれを具体的に考察することにする。

2. 新疆における農的郷鎮企業の典型事例の考察

ここでは、新疆の農的郷鎮企業の実態を把握するために典型的な3地区の事例より検討する。すなわち、北疆では競争力のあるウルムチ県（首都のある県）の八家戸町の集団企業事例、東疆では多角的な農業経営で代表的なトルファン地区の集団企業と私有企業の事例、南疆では綿と食料の生産基地と言われているカシュガル地区の事例を取り上げ、検討を進めることにする。

(I) 八家戸町の集団企業事例

本町はウルムチ県の北に位置し、耕地は1,013 mu (67.561 ha)、総人口は2,913人である。回族を中心とした地域で、農村人口一人当たりの耕地は0.5 mu (3.335 a) にすぎないという工業地域である。1984年に集団所有制企業を中心とした郷鎮企業が形成されたが、その頃から私有郷鎮企業が急速に発展した。1992年までの間に企業総数は47になったが、そのうち集団企業が20で42.5%、私有企業が27で

表2 郷鎮企業の発展と農家純収入

	1979	1980	1985	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000
農家人口1人当たり郷鎮企業生産額(元)	33.9*	36.1	140.7	318.2	371.1	367.2	711.8	1352	2018	2655	2771	2818	3235	2467
農家人口1人当たり純収入(元)	143	210	394	648	703	740	778	936	1137	1290	1500	1600	1473	1618

出所：新疆統計局編「新疆統計年鑑」2003年版、中国統計出版社及び「新疆郷鎮企業局年報」より作成。

注：*は、1978年の数字を指す。

表 3-1 新疆ウイグル自治区における農村居民の需要が増加した農産物加工品の推移

	1978	1980	1985	1990	1995	2000
食油 (kg)	1.97	2.49	4.04	5.17	5.8	7.06
肉 (kg)	5.76	7.75	10.97	11.34	11.29	14.63
食糖 (kg)	0.73	1.06	1.46	1.5	1.28	1.28
乳製品 (kg)	0.8	1.2	2.05	2.41	3.22	4.97
家禽 (kg)	0.25	0.66	1.05	1.25	1.83	2.85
棉布 (m)	5.63	4.3	1.03	0.9	0.44	0.3
シルク (m)	0.02	0.06	2.54	0	0.02	0.02
革靴 (足)	0.32	0.51	0.07	0.67	0.69	0.66

出所：新疆統計局編「新疆統計年鑑」2001年版，中国統計出版社より作成。

表 3-2 新疆ウイグル自治区における都市住民の農産物加工品に対する需要の推移

	1985	1990	1995	1998	1999	2000
食糧 (kg)	134.8	130.7	97	86.7	84.9	82.3
野菜 (kg)	144.4	138.7	116.5	113.7	115	114.8
食油 (kg)	5.8	6.4	7.1	7.6	7.8	8.2
牛・羊肉 (kg)	2.1	3.3	2.4	3.4	3.1	3.3
家禽 (kg)	3.3	3.4	4	4.7	4.9	5.5
卵 (kg)	6.9	7.3	9.8	10.7	10.9	11.2
乳製品 (kg)			5.2	7.3	9.2	11.6
水産品 (kg)	7.1	7.7	9.2	9.9	10.3	9.9
食糖 (kg)	2.5	2.2	1.7	1.8	1.8	1.7
タバコ (kg)	36.2	35.2	28.6	27.3	26.8	27.5
棉布 (m)	2.6	1.3	0.5	0.4	0.3	0.3
シルク (m)	0.5	0.4	0.2	0.1	0.1	0.03
洋服 (枚)	2.9	2	5.4	5.8	6.3	6.3
革靴 (足)	0.6	0.6	0.8	0.8	0.8	0.8
コート (枚)	116.2	170	204.2	191.1	195.2	169.2
絨毯 (m)	86.8	123.8	139.8	142.1	145.7	143.3

出所：新疆統計局編「新疆統計年鑑」2001年版，中国統計出版社より作成。

57.5%を占めた。1995年からウルムチ県における郷鎮企業総数に対する私有企業の割合はさらに高まり、2001年には703企業(97.1%)に急増した。産業別からみると、主はセメント、プレハブ材、建築材料、織物、商業飲食等の第二次産業と第三次産業に分類される事業を行っている。

このなかで、「天池織物会社」は集団所有制会社であり、1988年に町の幾つかの会社が総額60万元を投資し設立した会社である。設立当初は職員が60人(うち管理者5人、専門家6人)でセーター、スカート等の40種類の商品を生産し、生産量は2万枚程度、利潤は10万元以上であった。1992年には規模拡大に向けた資金不足という問題を解決する為に台湾の商者との共同化を進め、共同経営によって競争力を高めてきた。最近の経営状況を見ると、職員は20

代の女性を中心である。職員数は90人増加し150人になった。生産している商品では、最初の40種類からより多くの種類の商品を生産するようになった。その結果、毎年200種類の商品を生産しており、当初より160種以上の新しい商品が次々に登場した。総生産量では、現在年間10万枚程度の織物を生産し、1988年の総生産量より5倍も増加という状況になった。

商品の販売先でも、最初の新疆ウイグル自治区内だけで販売するという狭い市場から、中国における別の省・区の市場でも販売するまで拡大した。聞き取り調査によると、本会社が生産している10万枚程度の商品の80%は新疆自治区内で販売され、そのうち50%の商品は南新疆で、30%は北新疆で販売されている。残り20%の商品は中国の山西などの内地で

販売されている。販売額は1,100万元程度の水準になっている。

さらに近年では、品質の良さと地域に密着した民族的なデザインと種類の豊富さが消費者から認められている。生産量の50%は消費者からの注文生産である。

この企業の固定資産は町経営である1988年の60万元から共同化後の1998年には3.8億元まで増加した。また諸々の郷鎮企業による農閑期の農民の雇用や地域振興によって農民1人当りの収入は同じ期間に226元から6,130元まで増加している。八家戸町では郷鎮企業の存在は必要不可欠なものになっている。

(2) トルフアン地区の集団企業と私有企業の事例

トルファンは、東天山の南（東疆）に位置し、海拔マイナス154mという中国でも低い山間盆地であり、新疆では典型的な乾燥砂漠地帯である。全体的に日照時間が長く（年間2,812時間）、積算温度が高いうえに昼夜の温度差が大きく、年間降水量も非常に少ない（年間16.4mm）ので果樹生産や綿生産に最適の条件を備えている地域である。このような条件で総人口（550,879人）の62%を農村人口が占める。2001年度のトルファン統計年鑑「中国統計出版社」によると、本地区の2000年の農業人口は34.2万人であった。人口1人当たり耕地面積は新疆平均の4.2mu(28a)に対し、その半分以下の1.8mu(12a)である。トルファン地区では昔から葡萄を中心的な作物とし、トウモロコシ、綿等が栽培されているが、農業用水は地下水によって確保されてきている。また、トルファンは新疆ウイグル自治区の中で代表的な観光地と言われる地域でもあり、観光業も発展している。

新疆ウイグル自治区においても他の地域と同様、郷鎮企業は発展的な傾向をたどっている。郷鎮企業局の提供した資料によると、2001年の企業数は20,905で、1997年の企業数1,934より10.8倍になった。産業別にみると、農的企業の増加が42.3%、旅行・飲食業を行う企業の増加が19.4%であった。総企業数に占める割合は、流通業、交通運輸業、旅行飲食業という第三次産業が高く、2001年では89.6%であった。また、工業と建築業を行っている第二次産業の郷鎮企業の割合は9.9%である。第一次産業と言われる農的郷鎮企業の割合が低い。近年では、果樹・葡萄や畜産を中心とする農的郷鎮企業が活発に展開してきている。また、農業と観光を一体にするという観光業や葡萄の加工を行うという

農的郷鎮企業も着実に増えてきている。そこで、これらの代表として二つの事例からみることにする。

[事例1] 集団企業の事例 — ピチャン金碓明珠農業開発基地

ここで調査対象とした明珠農業開発基地は、大規模な集団所有制の郷鎮工業企業であるピチャン金碓が、1996年11月に220万元の自己資本を投資して作った子会社である。この会社は県都から22km離れたゴビ砂漠の中に位置し、汽車の駅にも近いところにある。年平均降水量が25.3mm、蒸発量2,751mm、平原最高気温が40℃である。このゴビ砂漠を先進的な灌漑技術 — 滴管設備で開発し、新疆の各地区で現在生産されている果樹の全部の種類をここに集め、代表的な緑色果樹園²⁾を作っている。このような緑色果樹園は、農業と観光を一体の観光業を行っている。そして、ここには開発予定の土地面積が2万mu(1,333.3ha)あり、職員が43人（平均年齢約30歳）いる。毎日の労働時間は8時間で、給与は従業者が500元（会社が所有しているアパートがあり、家賃は無料）、指導者は800元である。冬になると（11月から翌年の2月末まで）、農業従業者に対して毎日8時間の農業技術の研修を行っている。

現在は、本企業がスリランカ製の滴管設備を使用して開発した土地面積が5,000mu(333.3ha)ある。そのうち、342mu(22.8ha)の土地で防風林を植え、他の開発地ではナツメを中心として葡萄80mu(12ha)、メロン、スイカ及び他の作物を生産している。2002年の8月からは、1,000mu(149.7a)の土地での開発が始まった。その他、観光客のために、総面積750m²のコテージ式ホテルを2棟作る予定で、現在は1棟のコテージ式ホテルがすでに建設されている。もう1つのコテージ式ホテルと720m²レストラン面積も建築されている所であった。ゴビ・砂漠の中にいることを感じさせないほどに整備された環境が作られている。それと同時に農業経営の方でも生産拡大と高い経済効果をあげ始めているのが本企業の特徴である。例えば、2001年当初に実ができた100mu(6.7ha)の土地でのナツメの生産性をみると、1株当りの生産量は平均4kgであり、ナツメの総生産量は44,000kgにもなっている。kg当りの卸売り価格は15元で、総売上は66万元になった。2002年はその他の300mu(20ha)の土地でのナツメも実ができて収穫ができるようになってきたので、今年の実生産量は176,000kg、総売上は264万元になるということであった。

〔事例2〕 私有企業事例 — 有畜複合の郷鎮企業

次に取り上げるのは、経営主スマイル氏の経営で、新疆ウイグル自治区を代表する大規模な農的郷鎮企業である。家族3人と職員6人の労働力をもとに経営をしており、経営形態では葡萄を中心とした果樹・畑作、酪農などの大規模複合経営を営む私有企業である。当経営は、この地域の中でも長い歴史を持っている企業で、1983年に葡萄と畑の生産から経営を開始した。その後、1990年代から畜産を導入し、果樹・畑作及び酪農を一体とした有畜複合経営として展開している。果樹・葡萄と畜産・酪農などの多角的な生産・販売を行っている点が本企業の特徴である。

現在、畑作ではトウモロコシを作付し、果樹は葡萄を生産している。酪農部門では乳牛8頭、搾牛乳4頭を飼養している。他に羊330頭、ハト100羽、アヒル70羽などを飼養している。経営耕地は240mu (16.1ha)、総収入は全体で106.8万元であり、うち葡萄が100万元、牛・羊の個体販売が2万元、乳牛の生乳販売が4.8万元である。総収入の構成比をとると、葡萄が93.6%、牛・羊が1.9%、生乳が4.5%を占める。この地域の農家の平均収入が1万元弱であることを考えると、収入が非常に多い。

(3) カシュカル地区の事例考察 — 私有企業のT食品有限会社

T食品有限会社は私有郷鎮企業であり、カシュカル市からコナシャール県に至る国道のそばに造成された工業開発区に位置している。交通条件がとても便利な所であり、カシュカル市とコナシャール県との距離も10kmである。

この企業主トホテ・アジは26歳、5人の家族(妻と子供が3人)で、2000年に4.5万元の自己資金を元手に40頭の乳牛を購入し酪農経営を開始した。一日の産乳量は平均で660kgであったが、需要が余り無いため販売した牛乳の量は少なく、当年には総産乳量の30%、2001年では50%を販売したにすぎないという状態であった。そこで、加工事業を導入することを計画し、2002年の7月から乳製品の加工生産を開始した。工場面積は5千m²、総投資が123万元であり、そのうち流動資金の20万元は銀行からの借入金で、103万元が自己資金である。職員が20人、うち技術者が2人で、そのうちの1人は県の畜牧局から派遣され、3年契約で働いている。販売の担当者が1人、会計士1人、乳牛の飼養管理担当者が4人である。一日の労働時間は8時間半である。

加工している商品は加工牛乳とヨーグルトであ

る。この構成比は、加工牛乳が中心で加工商品の占める割合が80%近くである。加工商品の販売方式とは、第1に、本県との距離が190km程のイエケン県と240km程離れているボスカム県に届けて販売をするという地域外のもの(このようなことは新疆では珍しいことである)と、第2に、本県にある会社の専門店を通じて地域内に販売するというものである。加工商品の品質の良さを消費者から認められたので、その3分の2は消費者へ直接販売をしている(以上で述べた地域外という市場での販売を示す)。残りの3分の1は、本会社の専門店販売している。2002年8月の売上は9万7千元になり、対前月比105%に増加した。加工原料として使用されている牛乳の3分の2は、周辺の6地域の農民から1kg当り1.5元~1.7元で購入している。この価格はバザールでの売買より0.3元~0.5元まで安いようだが、農家にとっては本会社に毎朝すべての牛乳を販売することにより、固定的な収入と販売にかかるコストをなくすることができるという点が大きなメリットがある。バザールでの分安定な販売収入より農民にとっては固定的な収入を得ることが重要な意味を持つようである。

3. 考察結果と今後の課題

これまで見たように、新疆・ウイグルにおける農業部門を重要な柱とする農的郷鎮企業は集団企業と私有企業のふたつともに、問題を抱えつつも着実に進展し、新疆ウイグル自治区の国民経済の中で高い位置を占め、新疆農村・農民経済発展にとって大きな役割を果たしつつある。今日でもこれをさらに発展させようと関係者や関係機関・団体が努力している。

ところが、最近、農的郷鎮企業の集団企業だけでなく私有企業も展開が厳しい状況に直面している。そのひとつとして、新たな投資資金が不足し始めているという問題があげられる。とくに、企業数が増加している私有企業の郷鎮企業にとっては利息が高いため資金の借入れは難しく、経営規模拡大のための資金が不足がちになっている。このことは、新疆の郷鎮企業の経営規模が中国の平均水準より小規模で、経済効果もあがらないことの原因にもなっている。

また、人材不足の問題もある。とくに従業員や指導者に技術力のある人材が不足している。そのことは、商品の品質向上、競争力の確保を難しくしている原因になっている。そのため、企業では、ピチャン金磁明珠農業開発基地で見たように様々な方法で

従業者に対しての技術指導を行っている。政府も技術教育システムを改善する必要があると思われる。

さらに、産業部門からみると、第2次産業の中での加工業の比重が高くないうえに、農産物加工では第一次加工を中心としているため、付加価値部分の比重が少なく、経営成果が上がっていないという問題がある。新疆郷鎮企業の改革としては、加工業の比重、特に付加価値生産の高い第二次加工部門を高めていく必要があると思われる。加えて今後は、産地で、それぞれの特産物・農産物をブランド化し、有機農業の展開を強めていく必要があると思われる。これらの課題を克服することによって、新疆の農的郷鎮企業の益々の発展がもたらされ、ひいては地域の農業・農家経済の発展に繋がると考えられる。

注釈及び参考文献

[注釈]

注1) 特色農業とは、政府が推進されている、地域の特徴を生かした農業を指す。新疆ウイグル自治区は中国の西北に位置している典型的な乾燥砂漠地帯である。全体的に日照時間が長く、積算温度が高いうえに昼夜の温度差が大きく、年間降水量がとても少ないので、葡萄、ナシ、メロン、ザクロ、アンズなどの果樹と綿、ベニバナの生産に最適の条件を備えている。1999年7月、新疆ウイグル自治区政府は、新疆の農業産業化を推進するという方向に向け、新疆農産物

の特徴と地域特性を生かしていくために「自治区特色農業資源産業化研論会（シンポジウム）」を開いた。

注2) 緑色果樹園とは、農薬を使わないで健康的な果樹生産している農園の意味である。

[参考文献]

- (1) 上野和彦『現代の中国の郷鎮企業』大明堂発行、1993年。
- (2) 章浩『郷鎮企業の地域的発展とその問題点』『農村経済研究』京都農業大学農業経済学会。
- (3) 丸川知雄『中国企業の所有と経営』、巖善平「郷鎮企業における所有構造改革——展開と平価——」。
- (4) 李周為『新疆特色農業資源産業化』新疆人民出版社、2001年3月。

[付記]

本稿は、北海道農業会議「北方農業5」（2003年5月号）で発表した原稿の一部を補正し大幅に加筆したものである。

本稿作成にあたって、校閲者や、柳村教授の懇切丁寧なご指導・助言をいただいた。また、院生、及び研究室の学部生などにもご支援をいただいた。記して感謝を表す。